資料２①　２５人学級導入の効果検証（全体の概要）

※　今後、内容の変更はあり得る

１．検証内容

非認知能力の側面、学力の側面、学校関係者、保護者の意見

２．調査対象

地域バランスを考慮しつつ条件１及び条件２を同時に満たす小学校５校を選定

＜条件１＞　Ｒ２年度（２５人学級導入前）に１年生の１学級あたりの児童数が２５名を超えていること
＜条件２＞　Ｒ３年度（２５人学級導入後）に１年生の１学級あたりの児童数が２５名以下であること

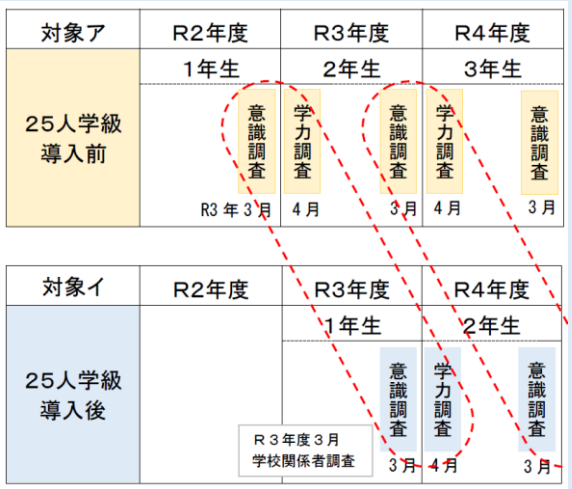
○　対象児童数：Ｒ２年度入学児童　３２２名／１,５９４名（対象ア：２５人学級導入前　１学級当たりの人数が25人を超えている）
Ｒ３年度入学児童　３１８名／１,５３４名（対象イ：２５人学級導入後　１学級当たりの人数が25人以下）

３．調査方法

○　児童を対象とする学校生活等意識調査
（非認知能力に関わる内容を含む）
○　児童を対象とする学力調査
○　学校関係者（学校長、２５人学級の１年生担任）を対象とする質問紙調査
○　学校関係者からの聞き取り

４．実施スケジュール

※　令和５年度以降も継続



５．まとめ

令和２年度３月から令和４年度４月に実施した調査の結果から

２５人学級導入の効果として考えられること

※　結果の概要は次ページ以下を参照

○　児童の意識と教師の取組から（学校生活等意識調査と質問紙調査から）
・25人学級では、教師が話を聞いたり、声かけを多くしたりするなどのコミュニケーションの充実を図ることができ、児童が教師や友達に自身のことを伝えやすい環境がつくられている。
・少人数になることで全員発言できる授業が増えるなど、発表の機会が増え、それが児童の発表への意欲の向上につながっていると考えられる。

○　学校運営の視点から（質問紙調査と教員からの聞き取りから）
・25人学級導入に伴う教員数増により、児童への支援の体制が充実している。
・ソーシャルディスタンスの確保など感染症対策がしやすいことや、ロッカーなどのゆとりある使用が可能である。

○　学力の側面から（学力調査から）
・個々の児童のつまずきやノート記述に対する状況把握や指導・助言に時間をかけることが可能となる。それにより、例えば、問題文の意図を正しく読み取り、的確に表現する力の育成に影響があると考えられる。

○　児童の実態と学力の側面から（学校生活等意識調査と学力調査から）
・少人数学級により、児童が学級内で発言する機会や児童１人にかけられる教師の声かけの回数が増加し、学力の素地となる関心・意欲の向上につながると考えられる。

○　教員の負担軽減の側面から（教員からの聞き取りから）
・25人学級では、様々な業務の負担が軽減されている。担任の実務的な作業が減った分、児童の支援、指導の時間が確保できている。

⇒25人学級の導入による効果は多岐にわたると言える。

引き続き調査を継続

資料２②　２５人学級導入の効果検証（調査結果の概要）

１．学校生活等意識調査結果の概要

◇　２５人以下の学級において効果として現れていると考えられること

※　今後、内容の変更はあり得る

※　対象ア：25人学級導入前　対象イ：25人学級導入後

※　肯定的な回答・・・①「いつも、とても」②「ときどき、すこし」と回答した児童の割合の合計

「2　先生は自分の良いところをほめてくれますか」

対象ア、対象イについて肯定的な回答をした児童の割合は、ともに約89%である。
そのうち①「いつも」と回答した割合に着目　　対象ア　37.9%　対象イ　42.9%
・少人数により一人一人への教師の声かけの機会が多くなっていると考えられる。

「3　困ったときに先生や友達に言えますか」

対象ア、対象イについて肯定的な回答をした児童の割合は、ともに約85%である。
そのうち①「いつも」と回答した割合に着目　　対象ア　54.2%　対象イ　59.3%
・少人数になったことにより児童側からも教師への声かけがしやすくなったと考えられる。また、友達同士の関わりが増えたため関係がつくりやすくなったことも影響していると考えられる。

「１８　自分の考えを発表していますか」

対象ア、対象イについて肯定的な回答をした児童の割合は、ともに約84%である。
そのうち①「いつも」と回答した割合に着目　　対象ア　44.1%　対象イ　44.7%
・少人数になることで発表の機会が増え、それが発表への意欲の向上につながっていると考えられるが、今後の調査の結果を注視したい。

◇　その他、①「とても」「いつも」と回答している割合が、対象イの方が上回っている項目
「学校に行くのは楽しいですか」「学校の勉強は楽しいですか」「自分から進んで勉強をしていますか」　など　　※これらの項目について肯定的な回答は全て90%を超えている。

◇　その他、調査結果からみえる傾向

※　数値は、①「いつも、とても」と肯定的な回答をした児童の割合

「友達と仲良くしていますか」　対象ア　85.9%　対象イ　87.2%
「決められた仕事をしっかりやっていますか」　対象ア　80.1%　対象イ　76.7%

・「友達と仲良くしていますか」の質問に「①（いつも）」と回答している児童の割合は対象イの方が大きい。
・自身の行動の判断基準が関係する項目である「決められて仕事をしっかりやっていますか」の質問には、対象イは、対象アより肯定的な回答が下回り、否定的な回答の割合が若干大きくなっている。

少人数になることにより、教師の指導が個々の児童に行き渡りやすくなり、児童の生活習慣や節度ある行動、規範意識に関する判断基準に影響。

少人数により他者との関係性が育まれる一方で、周囲の状況が把握しやすくなり、例えば、１回でも仕事を忘れると「決められた仕事をしっかりやっていますか」に否定的な回答をするなど、自身の行動の判断基準を厳しくしていることが考えられる。

～　学校生活等意識調査の項目間のクロス集計から　～

・「先生は自分のよいところをほめてくれますか」と「学校に行くのは楽しい」について、どちらも①「いつも」と回答している児童の割合は、対象アが34.0%、対象イが38.5%であり、対象イが対象アを上回る。（表１）
・その他、「学校の勉強は楽しいですか」と「学校に行くのは楽しい」のクロス集計結果についても同様の傾向が見られる。
○　「先生がよいところをほめてくれる」環境、「学校の勉強が楽しい」と感じられる環境は、児童が「学校へ行くのは楽しい」と感じることに影響。

表１　「１３.学校に行くのは楽しいですか」と「２.先生は自分のよいところをほめてくれますか」の回答のクロス集計

対象ア	項目	２．先生は自分のよいところをほめてくれますか				
項目	回答	①	②	③	④	総計
１３.学校に行くのは楽しいですか	①	34.0%	35.0%	4.9%	0.7%	74.5%
	②	2.9%	13.4%	1.6%	0.7%	18.6%
	③	0.7%	2.9%	0.7%	0.0%	4.2%
	④	0.3%	0.7%	1.0%	0.7%	2.6%
	総計	37.9%	52.0%	8.2%	2.0%	100.0%

対象イ	項目	２．先生は自分の良いところをほめてくれますか				
項目	回答	①	②	③	④	総計
１３．学校に行くのは楽しいですか	①	38.5%	33.0%	4.8%	2.2%	78.5%
	②	3.5%	8.7%	1.9%	0.0%	14.1%
	③	0.6%	2.2%	1.0%	0.0%	3.8%
	④	0.3%	1.0%	1.3%	0.6%	3.2%
	総計	42.9%	45.2%	9.0%	2.9%	100.0%

２．学校関係者（25人学級）による質問紙調査の結果の概要

◇　２５人以下の学級において効果として現れていると考えられること

※　数値は、回答を得点化した平均の値を表す。（「そう思う」４点　「どちらかといえばそう思う」３点　「どちらかといえばそう思わない」２点　「そう思わない」１点）

◇　周りとの関係（教師と児童、児童同士の関係）（担任の回答）

「話を聞いたり、声かけを多くしたりするなどのコミュニケーションの充実を図ることができた」 3.8点（/4点）

（担任の記述）「児童同士のコミュニケーションが図られるとともに、休み時間に子どもたちと遊ぶ機会が増えた。そのことにより、児童同士がお互いの良さを認め合え、学級に落ち着きが生まれ、まとまりが向上した。」

○ 学級担任は少人数により声かけが多くなっていることを自覚。→児童も同様

（参考：「先生は自分の良いところをほめてくれますか。」 対象ア 37.9%　対象イ 42.9%）

○ 「コミュニケーションの充実を図ることができたこと」による児童が周りに自身の事を伝えやすい環境づくり。→児童も同様

（参考：「困った時に先生や友達に言えますか。」対象ア 54.2%　対象イ 59.3%）

◇　学習の仕方（担任の回答）

「発言の機会を増やしたり、話合いの時間を充実させたりすることができた」 3.4点（/4点）

（担任の記述）「授業の中で全員発言する機会をとることができ、児童一人一人が発言する経験を蓄積することができた。経験を重ねてきたことで、クラス全体で積極的に発言する雰囲気ができ、児童の発言することへの恥ずかしさや抵抗感が薄まってきたと感じる。」

（参考：「自分の考えを発表していますか」対象ア 44.1% 対象イ 44.7% 対象イの方が若干上回る）

○　少人数により一人一人が活躍できる場を意図的に設定。

「実験や実習等の体験的な学習を行うことができた」3.0点（/4点）

○　授業の構成上の工夫に関する項目は、他の項目に比べると若干低い傾向

→ コロナ禍の影響もあるが、少人数によりきめ細かな支援や個別の指導が可能になっているにもかかわらず、それを全体の授業の改善として生かしきれていない現状があるのでは。

○　少人数の環境を十分に生かすことのできる授業構成については、今後の課題。

◇　学習指導の工夫（担任の回答）

「一人一人の学習状況を把握し、きめ細かな指導の充実を図ることができた」 3.9点（/4点）
「学習の遅れが見られる児童に、補充的な学習を行うことができた」 3.8点（/4点）
「教材、教具や学習シートなどを個別に準備することができた」 3.4点（/4点）

○　少人数であるために、個別の指導に時間をかけることができるという実感。

◇　生活指導の工夫（担任の回答）

「日常の観察や生活の記録から児童理解を十分行うことができた」　3.8点（/4点）
「話を聞いたり、声かけを多くしたりするなどのコミュニケーションの充実を図ることができた」 3.8点（/4点）
「いじめ、不登校、問題行動など、児童が抱える問題へのきめ細かな早期の対応ができる」 3.8点（/4点）

○　教員が個々の児童の状況を把握し日常的に対応ができる状況。

◇学校経営に与える影響（学校長の回答）

「学級担任が児童の実態を詳細に把握することができるようになった」「個々の課題に対して共通理解を図りやすくなった」4.0点（/4点）

○　学校長からみても、担任が児童一人一人の状況を把握しやすくなっていることを実感。

「教職員が増えることにより、学級経営上の問題が生じたときの支援体制を整えることができた」3.6点（/4点）
「校外学習の付き添いなど安全管理の点で連携して指導に当たることができた」 3.8点（/4点）

○　25人学級導入に伴う教員数増により、児童への支援の体制が充実。→　学校運営の視点からも効果

３．学力調査の結果の概要

◇　平均正答率について
対象イに次の傾向
- 繰り上がりのあるたし算やひき算の問題について正答率が90%を超えており、対象アの正答率を若干上回っている。
- 「示された時計の図を見て、時こくを求める」問題について正答率が90%を超えており、対象アの正答率を3.2ポイント上回っている。
- 「たし算とひき算が混ざった式の意味を理解し、問題文をつくる」問題（記述の問題）は、正答率が80%を下回るが、対象イは対象アより4.8ポイント上回っている。

○　たし算やひき算のつまずきに対する個別指導の時間の確保がなされていると考えられる。（参考：学校関係者の調査「一人一人の学習状況を把握し、きめ細かな指導の充実を図ることができた」 3.9点）
○　日常生活に関連する時計の読み方に関して、授業内だけでなく日常の学校生活における指導が自然と積み上げられていることが考えられる。（参考：学校関係者の調査「話を聞いたり、声かけを多くしたりするなどのコミュニケーションの充実を図ることができた」 3.8点）
○　個々の児童のノート記述に対する読み取りと指導・助言に時間をかけることが可能。問題文の意図を正しく読み取り、的確に表現する力が育成されてきていることが考えられる。（参考：学校関係者の調査「学習の遅れが見られる児童に、補充的な学習を行うことができた」 3.8点）

◇　無解答率について
対象イに次の傾向
- 無解答率の平均は、対象アと対象イの比較では、対象イの方が若干ではあるが対象アよりも下回っている。
- 記述の問題の無解答率は、対象アが7.6%、対象イが3.8%であり、対象イが3.8ポイント下回っている。

○　教師が児童の発言する場面を意図的に増やすことができ、児童が表現する機会が増加していることが無解答率の低さに影響していると考えられる。

◇　学力の伸びについて
- 対象アについて、学年進行に伴い、同じ領域、系統の問題の正答率を考察。

○　令和５年度以降、対象アと対象イの正答率の伸び率を比較し学力の影響を分析。

４．学力調査の正答数と意識調査の関係の概要

◇　対象イにおいて正答数は３～４問（問題数全８問）であるが、肯定的な回答をした児童の割合が高い項目

「自分から進んで勉強をしていますか。」（学習の仕方）　※（　）内は対象ア

	肯定的回答をした児童	否定的回答をした児童
正答が７～８問の児童	９２％(92%)	８％(8%)
正答が３～４問の児童	１００％(91%)	０％(9%)

※「自分の考えを発表していますか」の項目も同様の傾向

対象イでは、「自分から進んで勉強をしていますか」の質問項目について、正答数が３～４問の児童のうち、すべての児童が肯定的な回答。
○　少人数の学級により、児童が学級内で発言する機会や児童一人にかけられる教師の声かけの回数が増加したことにより、正答数が少なくても学力の素地となる関心・意欲をもつことができていると考えられる。

５．教員の負担軽減

◇　少人数学級になることより軽減された具体的な業務
・宿題の採点　・家庭訪問や保護者面談
・個人名のシールなど作成　・図画や習字の作品掲示
・お知らせなどの配付作業　・通知表の所見　・成績処理
・机や椅子の消毒　など

○　担任の実務的な作業が減った分、児童の支援、指導の時間が確保できるようになっている。
○　学級数の増に伴う教員増により学年の仕事の一人当たりの分担も少なくなっているため、学校、学年としての分掌業務も軽減。